

# 小学校社会科におけるプロジェクト・ベース学習の実践方略

## — 学校と地域が協働して創造する授業に着目して —

長 澤 慎 哉

稲城市立若葉台小学校

### 要 約

本稿は、総合的な学習の時間などにおいて実践されているプロジェクト・ベース学習を小学校社会科に取り入れるための実践方略について検討するものである。そのために、小学校社会科で重視されている問題解決的な学習において重要な位置付けである「学習問題」に焦点を当て「学習問題」に関する基礎的な調査に基づき、その問題点や改善点を指摘した。その上で、これまでのプロジェクト・ベース学習の枠組みを小学校社会科の問題解決的な学習の文脈として捉え直すことで、従来の問題解決的な学習過程を充実させることを試みた。そのための実践方略として、地域教材を軸として、学校と地域人材が協働して授業を創造することが、小学校社会科においてプロジェクト・ベース学習を実践する上で有効であることを事例を基に示した。

キーワード：問題解決的な学習 学習問題 プロジェクト・ベース学習 地域教材 地域人材

### はじめに

本研究は、小学校社会科におけるプロジェクト・ベース学習（Project based learning 以下 PBL と表記）の実践方略として、学校と地域人材が協働して創造する授業を提案することを目的とする。その際、いわゆる小学校社会科の「問題解決的な学習」を基本にしながらも、PBL の授業設計を組み込むことにより、問題解決的な学習の充実が図られることを示す。

PBL は、実社会に直接働きかける学習として総合的な学習の時間を中心に発展してきた学習方法である。木原（2011）は、PBL を教科学習としてのアプローチと総合的な学習の時間としてのアプローチに分けて考察しており、前者の場合はプロジェクトを教科の目標・内容に位置付ける必要性を論じている<sup>1)</sup>。

小学校社会科の目標・内容を考えた場合、平成20年版小学校学習指導要領解説社会編においては「各教科等の指導に当たっては、問題解決的な学習

を重視すること<sup>2)</sup>と示されており、「問題解決的な学習」が小学校社会科学習において内容を理解し、目標を達成する中心的な学習方法と捉えることができる。実際の授業では、この「問題」をいわゆる「学習問題」として設定し、解決に向けての学習が展開されている。

この「学習問題」について、中田（2014）は「学習問題とは、問題解決的な学習において、子供たちにとってその単元・その時間の『めあて』となるものであり、教師にとっては『ねらい』につながるものと捉えることができ、学習問題がその後の学習の展開に大きく影響する」と説明しており、問題解決的な学習を充実させるためには、質の高い「学習問題」が必要であることが理解できる<sup>3)</sup>。

それでは、実践において、学習問題は単元のどの段階で設定され、どのような内容になっているのだろうか。そのことを明らかにするために、実践事例における学習問題を調査・分析することを通して、問題解決的な学習の現状を明らかにした上で、改善点を検討することとした。

## 1 問題解決的な学習の現状

### (1) 現状の学習問題に関する調査

小学校社会科において問題解決的な学習を実践する上で、学習問題を設定することが一般的である。学習問題は、単元を貫く問いとして、あるいは一単位時間で子供が解決すべき問いとして機能する。ここでは、単元計画に位置付けられた学習問題を対象とし、毎時間ごとに設定されているものとは区別して論じることとする。

単元計画の調査に使用した資料は、全国小学校社会科研究会が毎年実施している全国研究大会の研究冊子である。ここには、各都道府県の実践事例が掲載されている。そこで、平成15年から26年までの12年間の全国の実践事例から、単元の何時間目に学習問題を設定しているか、どのような学習問題を設定しているか等を調査した<sup>4)</sup>。対象とした721事例中、単元の指導計画に明確に学習問題が示されていたのは387事例であり、そこから単元のどの時間に学習問題が設定されているかの平均値を示したのが表1である。

表1 単元中の学習問題設定時  
(全国小学校社会科協議会研究紀要より)

年度	平均設定時
15年	第4.3時
16年	第3.0時
17年	第2.7時
18年	第1.4時
19年	第2.6時
20年	第2.1時
21年	第1.6時
22年	第1.5時
23年	第2.1時
24年	第2.9時
25年	第1.6時
26年	第2.1時
平均	第2.3時

学習問題は、平均すると2.3時間目に設定されており、単元の導入で、社会的事象と出合い、そこから設定される学習問題は、後の学習の方向性を示す

機能を有していると考えられる。一方で、藤井(1994)は、学習問題が比較的初期の段階で設定されることの問題点を指摘し、子供たちの追究の発展に柔軟に対応するためには、学習問題も発展的に変容してゆく必要があることを主張している<sup>5)</sup>。つまりは、学習問題を解決することを目的化せずに、問題解決的な学習を充実させるために学習問題を設定するという点に立脚すべきであると解釈できる。

### (2) 学習問題の役割と可能性

それでは、学習問題は問題解決的な学習をどのように方向付ける役割があるのだろうか。その類型から具体的に考察する。

例えば、北(2004)は、学習問題を「事実追究型」「論理的追求型」「探検型」「意思決定型」「作業・体験(的)型」の5類型に分類している<sup>6)</sup>。本稿では、北の分類を参考にしつつ、対象とした実践事例の学習問題から、新たな類型化を試みた。表2は、学年ごとの学習問題を分類した結果である。

この結果からは、学年に関わらず、「どのように(どんな)～だろう」という社会的事象の把握を目的とする事実把握型の学習問題が多いことが分かる。次いで「なぜ～」等で表現される社会的事象の意味を追究する意味追究型の学習問題が多くなっている。「どのように」や「なぜ」型の学習問題が多いのは、社会科という教科が、確たる事実に基づいてその意味を追究しようとすることに依拠していると考えられる。教科書においても事実把握型や意味追究型の学習問題が一般的に扱われていることも要因になっていると考えられる。一方で、複合型の学習問題も数多く設定されていることに着目すべきである。

複合型の学習問題には、単一の学習問題を超越しようとする意図が表れている。それでは、複合的な学習問題の構成について考察してみる。図1は、事例から読み取った複合型の学習問題の構成の例である。

複合型の学習問題の特徴として、学習問題を2つ以上設定していることが挙げられる。中には、同じ種類の学習問題を設定している事例も散見された。その中でも、活動型や意思決定型を軸とした複合型

表2 単元の学習問題の類型 (筆者作成)

学習問題の類型	キーワード	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
①事実把握型	どのように～・何を～・ひみつ	43	29	33	52
②意味追究型	なぜ・どうして・意味を～	17	19	7	14
③意思決定型	どちら・どうすれば・	1	3	8	9
④活動型	～しよう (つくろう)・考えよう	4	6	3	3
⑤複合型	①～④の複合	25	23	30	19

について考察を行う。これらの学習問題は「～しよう」「あなたならどうするか」等、子供が主体となる点で、事実把握型や意味追究型とは一線を画している。活動型や意思決定型を軸とした複合型の学習問題は行為志向であるため、問題としての成立が難しいとも言えるが、行為していく中で事実を調べたり意味を考えたりする活動が発生する可能性は十分に含まれており、現状の問題解決的な学習の文脈にそっている。

つまり、問題解決を「学習問題の解決」という狭義にとどめず、「子供たちが学習する上で生じる様々な問題を解決すること」と捉え直すことにより、複合型の学習問題は、目的化された問題解決的な学習を乗り越えるための学習問題として機能し、問題解決的な学習過程を充実させる可能性があると考えられる。

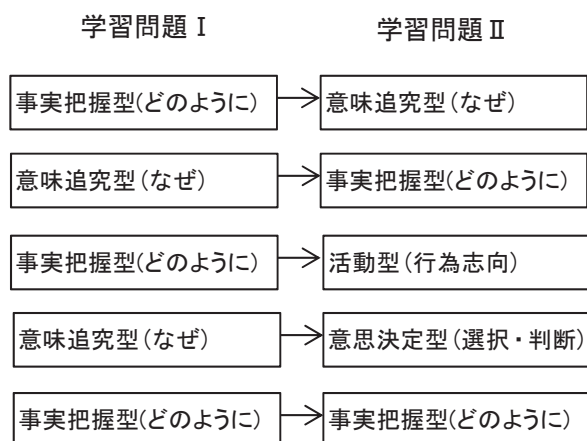


図1 複合型学習問題設定の構成例 (筆者作成)

## 2 小学校社会科への PBL の導入

### (1) PBL の枠組み

そこで、複合的な学習問題を生かしつつ、「プロジェクト」という活動型の学習問題を中心に単元を捉え直し、事実把握型や意味追究型という知識や技能を担保する学習過程を組み合わせることにより、さらに問題解決的な学習を充実させられると考えた。そのために総合的な学習の時間などにおいて実践されているプロジェクト・ベース学習 (PBL) を参考にすることとした。

まずは、一般的な PBL の枠組みについて、ここでは、グードヨンス (2005) の PBL の考え方を基にプロジェクトのステップと特徴を表6のように整理する<sup>7)</sup>。

ステップ①のプロジェクトの設定においては、プロジェクトが子供たちの生活に関連付いたもので、かつ興味があること、そして、そのプロジェクトが社会的に価値があることが特徴である。

ステップ②のプロジェクトの計画においては、子供だけ、あるいは教師だけでプロジェクトの計画を行うのではなく、プロジェクトに関わる者が共同で計画することが重要である。グループで計画した場合は、計画に無理がないか全体との調整を図ることも考えられる。

ステップ③は、主にプロジェクトを実行する段階である。読む、書く、聞く、話すなど多様な学習活動をプロジェクトの実行のために効果的に組み合わせることで、プロジェクトの達成とともに単元の目標を達成することを目指す。この段階で、実社会とふれる機会をもたせることが重要である。



表3 プロジェクトのステップと特徴（筆者作成）

ステップ	特徴
①適切なプロジェクトを設定する	・状況に関連付ける ・参加者の興味に沿う ・社会的価値をもたせる
②プロジェクトの計画を共同で開発する	・グループで計画する ・全体との調整を図る
③行為志向的に問題解決を図る	・多様な学習活動を行う ・実社会とふれる
④プロジェクトを実行し検証する	・学習成果物を作る ・成果と課題を確認する

ステップ④では、それまでの学習を基に学習成果物を作成する段階である。学習成果物は、作品志向であることや実社会に向けて発信することが求められる。また、プロジェクトによる成果や課題について参加者全員で評価することも重要である。教科の学習にPBLを取り入れる場合、学習の前後、途中において、常に教科の知識や技能を子供たちは得ることができているかを確認することも必要である。

## (2) 小学校社会科でのPBLのプロセス

上記のプロジェクトのステップと特徴に基づき小学校社会科学習でPBLを成立させるためのプロセスについて次のように検討した。

### ①プロジェクト対象の選定

PBLは、社会に直接働きかけることを重視する学習であるため、まずは、教師が対象となる人（地域や保護者、学校内等も含まれる）を学習内容に合わせて選定する。社会科の場合、学習指導要領にある内容に基づくことが条件であるため、プロジェクトを追究・達成することを通して内容を理解できるように留意すべきである。その際、対象の状況を勘案しながら、様々なプロジェクトの可能性を見いだせるようにする。そして、対象となる人と子供とのコンタクトが計画的に実行されるよう教師がコーディネートを適切に行う必要がある。従って、この段階は、教師が中心の活動となる。

### ②プロジェクトの設定・焦点化

この段階は、学習問題の設定や学習計画の立案と連動している。プロジェクトの設定方法については、

後の実践において詳細に述べる。なお、PBLを導入する初期段階においては、子供たちにプロジェクトを設定させた場合、学習のねらいとの齟齬や混乱が生じることが考えられる。子供たちの実態にもよるが、初期段階では、教師からプロジェクトを提示することを一つの方法として、段階的に子供たち自身でプロジェクトを設定できるように促していくことが必要である。

### ③プロジェクトの追究段階

ここでは、プロジェクトを達成するために問題解決的な学習が展開されることになる。ここでいう問題解決とは、プロジェクト達成のために個人やグループで調べたり、考えたり、表現したりすることであり、子供自身が問題を発見し、構成し、解決していく多様な学習活動が求められる。もちろん、教師が必要な情報を与えたり問いを投げかけたりすることも考えられるし、個人やグループでの追究の質を高めるために教師の介入が必要となることもある。意図したいのは、PBLを繰り返し、継続的に導入していくことにより、子供の問題発見力や問題構成力を高めることである。

### ④学習成果物の作成

PBLは、学習成果物を求めるため、追究段階では、対象について調べ考える活動とともに、学習成果物を作成する活動を行うことになる。学習成果物には、社会科としての理解すべき内容が表れていること、プロジェクトの対象（社会）にとって価値をもたせることが大切である。十分な活動時間の確保と学習効果を上げるために、総合的な学習の時間とのクロスカリキュラムの実施やPBLを実施する単元の焦点化等も勘案すべきことである。

### ⑤プロジェクトの発信

子供が作成した学習成果物を対象に発信し、その反応を得ることが重要な学習活動となる。直接伝える環境を設定することが望ましいが、難しい場合は、ICTを活用したコミュニケーションを取り入れると即時的な反応を得ることが可能になる。

プロジェクトの振り返りでは、一連の学習を通して、どのようなことができたか、考えが変容したかを振り返るとともに、今後の行動への期待等を記述

することを通して、社会参画の意欲へと高めていく。

### 3 PBLの実践方略

#### (1) 地域と協働する授業設計

PBLを小学校社会科に取り入れる上で、最も課題になるのは、プロジェクトの中核となる対象を選定しどのような教材を開発するか、である。この課題を解決する一つの方略として、学校と地域が協働して創造する授業を提案する。そのためには、次の視点での授業設計が必要である。

##### 地域教材を扱うこと

成立条件でも述べたように、PBLは、社会に直接働きかけることを重視する学習であるため、子供たちが直接働きかけられる可能性の高い地域教材を扱うことが望ましい。もちろん、地域を越えてPBLを実践することも可能であるが、その場合、ICTを活用する等の工夫が考えられる。

##### 地域人材の主体性を尊重すること

ここでいう地域人材とは、当該校の教員及び児童以外の授業に関わる地域の人々を指している。PBLの授業設計に際して、学校が一方的に地域人材を活用するのではなく、地域人材の思いと授業のねらいを統合し、それぞれの主体性を尊重し合うことで、継続的にPBLを実践できる機会が生み出されることにつながる。

##### 地域人材が授業に参画すること

地域人材が実際に授業に参画することを通して、多角的な視点で子供の学習を捉えることにつながり、それぞれの立場でPBLの価値を実感することができる。そのためには、授業設計、実践だけでなく、PBLの社会的価値について地域人材が評価するまで協働して取り組むことが望ましい。

#### (2) 実践事例Ⅰ

以上の実践方略に基づいた実践について示す。実践事例Ⅰは、2016年6月に、筆者と市内にある小学校第3学年担当のA教員の2人がそれぞれの勤務校で実践した。単元名は「学校のまわりの様子(全12時間)」である。学習指導要領では、第3学年及

び第4学年の内容(1)アに該当する。実践の展開は、表4に示す。

本単元は、小学校社会科の学習において、子供たちが行政区分としての地域について学習する内容である。学区域を中心に学校が存在する市区町村にまで学習対象を広げて調査・観察し、白地図にまとめる活動が解説でも示されており一般的な展開である。

本実践では、同市内の小学校に勤務する小学校第3学年担当のA教員及びその小学校の第3学年の子供たちが地域人材に当たる。A教員は、以前より自分が担任する学級の子供と市内の3年生の子供たちとの交流を願っていた。その願いを出発点として、本実践では「学校のまわりの様子を同市内の3年生に伝えよう」というプロジェクトを設定した上で、調べたことを相互的に発信するPBLの構成にした。

筆者が担任する子供たちがプロジェクトを追究する段階で、A教員には、勤務校に来てもらい、プロジェクトに対する価値付けと、A教員が担当する子供たちも同じようにプロジェクトに取り組んでいることを話してもらった。A教員が実際に授業に参画することにより、子供たちのプロジェクトに対する達成意欲が増し、明確な目的意識をもってPBLに取り組むことにつながった。最終的には、2校共にプロジェクトの発信として動画を作成し、相互的に視聴することを通してプロジェクトの達成とした。筆者もA教員が勤務する学校に出向き、子供たちのプロジェクトを価値付ける活動を行った。プロジェクトの振り返りとして、筆者が勤務する学校の子供たちの振り返りの内容を次に示す<sup>8)</sup>。

表 4 実践事例 1 の展開（筆者作成）

プロジェクト	学習目標	主な学習活動	評価規準(評価資料)
①プロジェクト対象の選定	1.四方位・八方位について理解し、学校のまわりの様子に関心をもつ。	・若葉台小学校のまわりについて話し合う。 ・若葉台小学校の学区地図をもとに四方位・八方位について確認する。 ・若葉台小学校から見て、学校のまわりにある主な建物や地域がどの方位にあるか調べる。 ・様々な場所の地図記号を知る。 ・振り返りを記入する。	・四方位や八方位の表し方、基本的な地図記号について関心をもち、学校のまわりの様子を調べようとしている。(調べたり発表したりする様子)
②プロジェクトの設定・焦点化	2.学校のまわりの様子を調べるためにプロジェクトを設定し、学習問題を知り、その答えを予想する。	・若葉台小学校のまわりの場所が3地区に分けられることを確認する。 ・学習問題を知る。	
	プロジェクト：若葉台小学校のまわりの様子を長峰小学校の友達に知らせよう。		
	学習問題：若葉台小学校のまわりは、どのような様子になっているのだろうか。		
	3.予想を基にして、学校のまわりの様子を調べるための学習計画を立てる。	・学習問題の予想として、若葉台小学校の学区の地図から読み取ったことをノートに書く。 ・若葉台小学校の学区地図を載せたワークシートを配布する。 ・読み取ったことについて発表する。 ・学習計画を立てる。	・学校のまわりの様子を調べるための学習問題の予想や学習計画を考え、適切に表現している。(ノートの記述内容)
③プロジェクトの追究段階	4.5.6.学校のまわりの様子について観察・調査する。	・見学場所に行くルートを知る。 ・社会科見学に行く。 ・社会科見学でワークシートに記入する。	・学校のまわりの様子について調べたことをノートやワークシートに分類しながらまとめている。(ワークシートの記述内容)
	7.学校のまわりの様子について観察・調査したことをまとめる。	・社会科見学で観察・調査したことを発表する。 ・見学に行った場所を地形、土地利用の様子、公共施設の場所と働き、交通の視点で分類する。 ・書いたことを発表する。 ・振り返りを書く。	・学校のまわりの様子について調べたことをノートやワークシートに分類しながらまとめている。(ノートの記述内容)
	8.学校のまわりの様子について、土地利用の様子と地形、交通との関わりを考える。	・表にまとめたことを基に、地形、土地利用、交通との関わりがある部分について考える。 ・「坂の多いところには～がある」「道路のそばには～が多い」などのリード文を基にして、土地利用と地形、交通との関わりについて書く。 ・書いたことを発表する。 ・振り返りを書く。	・学校のまわりの土地利用の様子と交通のかかわりや学習問題に対する考えを適切に表現している。(ノートの記述内容)
④学習成果物の作成	9.調べたことを基に、学校のまわりの様子について、白地図を作成する。	・学級ごとに、調べたことを発表する。 ・学級ごとに調べたところは、どのような特徴があるのかを考えて書く。 ・振り返りを書く。	・学校のまわりの地理的環境の特色やよさを作品に表し、白地図に示している。(作品の内容)
	10.作成した白地図を基に、学習問題に対する考えをまとめる。	・今まで学習したことを振り返る。 ・学習問題に対する考えを書く。 ・学習問題に対する考えを交流する。 ・長峰小学校の学校のまわりの様子について児童が説明した動画を視聴する。 ・振り返りを書く。	・学校のまわりの土地利用の様子と交通のかかわりや学習問題に対する考えを適切に表現している。(ノートの記述内容)
⑤プロジェクトの発信	11.学習したことを市内の小学校3年生に伝える。	・学習問題に対する考えをもとに、発表の練習を行う。 ・市内の小学校3年生に向けた動画を撮影する。 ・動画を発信し、若葉台小学校の教員の話聞く。 ・振り返りを書く。	・四方位や八方位の表し方、基本的な地図記号について関心をもち学校のまわりの様子を調べようとしている。(発表する様子)
	12.小単元の学習内容を振り返る。	・ワークテストを行う。 ・ワークテストの答え合わせを行う。	・学校のまわりの地理的環境の特色やよさを理解している。(ワークテストの内容)



### 《U 児の振り返り》

自分たちの学校のまわりのようすを他の小学校の人たちに伝えるなんて考えもしていなかったけど、実さいにやってみるととてもやりがいがあると思いました。ふだん、自分たちの学校について伝えることなんてないけど、いろいろな人に伝えてみたいと思いました。これからも学習したことを伝えるようにすると、いろいろな発見がありそうなのでよいと思います。またやりたいです。

### 《V 児の振り返り》

今まで他の学校の人とじゅぎょうをしたことはなかったので、とても新せんでした。テレビだったら、行かなくてもいいし、とてもべんりだと思いました。他の学校のまわりはどんなふうになっているのか知りたくなりました。ぼくは発表しなかったけど、他の人が発表するのを聞いて、今まで調べたことがしっかり分かるようになりました。つぎの社会のじゅぎょうで、みんなで何か作る時は、ぼくもやってみたいです。

### 《W 児の振り返り》

先生がさい初の時間に「長みね小学校の友だちに知らせよう」というふうにしたので、分かりやすかったです。若葉台小学校と長みね小学校のまわりでは、同じところもあるし、ちがうところもありました。長みね小学校の人たちが作った動画を見てよく分かりました。自分がしらべたところを発表する時も長みね小学校の人たちに分かるようにくふうして伝えることができたと思います。

それぞれの児童の振り返りからは、問題解決的な学習にPBLを取り入れることにより、目的意識や相手意識が明確になっていることが分かる。また、学習の成果物(学校のまわりの様子を紹介した動画)を交流することにより、学習内容の理解にもつながっている。A教員の振り返りについても示す。

### 《A 教諭の振り返り》

他の小学校の子供たちに伝えると知って、子供たちがいつもより生き生きと活動していたのが印象的でした。伝える相手や目的が明確になることで、子供たちも何のために学習しているのかが実感できるようになったと思います。子供たちが通っている学校の中だけでなく、外にまで目を向けることが、大切だとわかりました。何だか教室が広がった感じです。これからの学習でも、このような方法を多く取り入れることで、社会の学習が豊かになると思います。また、一緒に授業を作りたいです。

## (2) 実践事例Ⅱ

実践事例Ⅱは、2016年10月に筆者が実践したものである。単元名は「とうふ工場の仕事(全12時間)」、学習指導要領では、第3学年及び第4学年の内容(2)アに該当する単元である。

本実践では、市内のとうふ工場に焦点を当てて教材化することを試みた。このとうふ工場で作られたとうふは、市内の学校給食にも提供されており、子供たちが学習する意味意義を見いだせると考えたからである。しかしながら、とうふ工場の仕事については、市の副読本で扱われていないことから、学習成果物の価値を高めるために「とうふ工場の仕事を学習するための教科書を作ろう」というプロジェクトを設定した。

本実践では、とうふ工場で働いているBさんが地域人材に当たる。Bさんとは、複数回の打ち合わせとメールでの連絡を通して、協働的に授業設計を行った。またBさんから「子供たちには複数回に渡ってとうふ工場の仕事について話したい」という申し出があり、その意志を尊重する表5がその授業設計に基づいた展開である。「とうふ工場の仕事の教科書を作ろう」というプロジェクトの社会的価値については、将来的にその内容が副読本に載る可能性が十分にあり、市内の小学校やBさんにとって互恵的なものである。Bさんのモチベーションを高めることにもつながった。

子供たちがプロジェクトを追究する段階で、Bさ

んには、計4回ゲストティーチャーとして勤務校に来てもらい、とうふ工場の仕事についての話をしてもらった。内容に関しては、事前に確認したが、こちらの要望を伝えるよりもBさんが子供たちに伝えたいという思いを優先させた上で、子供たちとや

りとりをしながら話してもらうようにした。プロジェクトの発信として、学習したことを基にして作成した、とうふ工場の仕事の教科書をBさんに伝える活動を設定した。

表5 実践事例2の展開（筆者作成）

プロジェクト	学習目標	主な学習活動	評価規準(評価資料)
①プロジェクト対象の選定	1.地域には、様々な生産や販売、サービスに関する仕事があることに関心をもつ。	・見たことがある、知っている仕事を発表する。分類された仕事を基に考え生産の仕事について知らないことを確認する。	【関-①】 (発言・ノート記述)
②プロジェクトの設定・焦点化	2.地域にあるとうふ工場に関心をもち、プロジェクトを設定し、学習問題を見いだす。	・「とうふ工場で作られている」という事実から「工場」について確認する。 ・発表したことを基に、プロジェクトを設定し、学習問題を見いだす。	【思-①】 (発言・ノート記述)
	プロジェクト：「とうふ工場の仕事」の教科書を作ろう		
	学習問題：とうふ工場では、どのようにしておいしいとうふを作っているのだろうか。		
	3.学習問題に対して予想し、学習計画を立てる。	・学習問題に対する予想をノートに書いて発表する。 ・予想を基にして、グループごとに学習計画を立てる。	【思-①】 【関-①】 (発言・ノート記述)
③プロジェクトの追究段階	4.とうふ工場で働く人の話を基に、とうふの原料である大豆について調べる。	・とうふ工場で働く人の話を聞いて、とうふ作りの材料について分かったことをワークシートに書く。	【技-①】 (ワークシート記述)
④学習成果物の作成 ※本実践では、毎時間のワークシートをまとめたものを教科書として位置付けた。	5.とうふの原料についてまとめる。	・ワークシートを見ながら、とうふの原料が何であるかをまとめる。	【技-②】 (ワークシート記述)
	6.とうふ工場で働く人の話を基に、どのようにとうふが作られているのかを調べる。	・とうふ工場で働く人の話を聞いて、とうふの作り方について分かったことをワークシートに書く。	【技-①】 (ワークシート記述)
	7.どのようにしてとうふが作られているのかをまとめる。	・ワークシートを見ながら、とうふの作り方についてまとめる。	【技-②】 (ワークシート記述)
	8.とうふ工場で働く人の話を基に、とうふ工場がどのように変化してきたのかを調べる。	・とうふ工場で働く人の話を聞いて、とうふ工場の変化について分かったことをワークシートに書く。	
	9.とうふ工場の仕事の工夫について考える。	・とうふ工場の工夫について考えたことをワークシートに書く。 ・書いたことを基にとうふ工場の工夫を話し合う。	【思-②】 (発言・ワークシート記述)
	10.調べてきたことを基に、学習問題に対する自分の考えをまとめる。	・とうふ工場で働く人の話を基に、とうふ工場の工夫について考えたことをワークシートに書く。	【思-③】 (発言・ワークシート記述)
	11.地域にある生産の仕事が自分たちの生活を支えていること、国内の他地域との関わりがあることを理解する。	・それぞれの図を基に、分かったことについて話し合う。	【知-①】 (発言・付箋の記述)
	12.ワークテストに取り組み学習内容を確認する。	・ワークテストに取り組むとともに答えを確認する。	【知-①】 【関-②】 (ワークテスト・学習感想)
⑤プロジェクトの発信	13.地域にある生産の仕事のために自分たちができることを理解する。	・地域の生産の仕事が続いていくためにできることを話し合う。	【知-②】 (発言・付箋の記述)



#### 《X 児の振り返り》

今までとうふがどのように作られているのかわからなかったけど、B さんの話で作り方やとうふにこめている思いを知ることができて良かったです。とうふ工場がへっているの、みんなでは何かできるとよいと思いました。教科書は作るのが大変だったけど、みんなで分たんして作ったのでよい物ができたと思います。次の3年生がこの教科書を使って調べてくれるとうれしいと思います。

#### 《Y 児の振り返り》

B さんが4回も来てくれたのがすごいと思いました。それだけみんなにとうふ工場のことを伝えたいんだなと思いました。とうふ工場の教科書を作っている時にこれからもうとうふ工場が続くために何ができるのかを話し合いました。ポスターを作るとかいろいろアイデアが出たけど、やろうと思うとむずかしいことも分かりました。とりえず給食の時はこの勉強を思い出してとうふをのこさないで食べたいです。

#### 《Z 児の振り返り》

一番思い出にのこっているのは、B さんがとうふ工場の写真を見せてくれたことです。なかなか工場には入れないのでとてもき重だと思いました。あとは、とうふの作り方をくわしく教えてくれたことです。とくに、じゅうてんどうふの作り方はおどろきました。たくさんのくふうがあると分かりました。教科書を書く時はあまりうまくいかなかったけど、がんばりました。

実践事例Ⅰと比較すると、より学習内容に即した振り返りが記述として表れた。このことは、B さんが複数回にわたり授業に参画したことが大きく影響しているといえる。また、本実践では、プロジェクトの追究と学習成果物の作成を同時に進行する展開だったため、プロジェクトと学習問題との関連が子供たちにとって分かりやすい単元構成になっていた。プロジェクトの発信については十分な時間を取ることはできなかったが、次の3年生に向けてという目的意識や相手意識は、実践事例Ⅰと同様に明確

であったといえる。B さんの振り返りについても示す。

#### 《B さんの振り返り》

今までは、1時間であふ工場の仕事について話すことが多かったの、今回3時間も時間をもらえたことで授業の組み立てをよく考えるようになりました。学校の先生と一緒に授業を作ることに、教材や子供たちへの伝え方も深く考えるよい機会になりました。子供たちにとうふ工場のことを知ってもらい、給食の時に少しでも意識してもらえれば、よいなと思います。地域の一員として、携われたことを本当にうれしく思います。学校と地域とが一つになって子供を育てていくことが大切だということを実感できました。

## 4 まとめ

本稿では、PBL を小学校社会科に取り入れるための実践方略について検討した。これまでの実践に基づき、小学校社会科の問題解決的な学習における学習問題の設定や内容について整理することで、PBL を取り入れるための知見を得ることができた。PBL は、従来の問題解決的な学習においても複合型の学習問題として内包されていたと捉えることができるが、新たに「プロジェクト」として学習過程を再構成することにより、子供の目的意識や相手意識が明確になり、学習の必然性が生まれやすくなった。また、PBL に地域教材、地域人材の主体性、地域人材の参画という要素を実践方略として用いることにより、子供の学習意欲の高まりや学習内容の理解が期待できるともいえる。

一方で、地域という縛りがあることで、実施学年や内容が限定的になり、汎用性の高い学習方法として位置づけることが難しいことも事実である。

さらに、プロジェクトの設定については、現状、教師主導となることや学習の成果物の作成にかかる時間の捻出、活動が目的化する難しさなど課題も多くある。新学習指導要領の柱となっている「社会に

開かれた教育課程」を具現化する学習方法として期待できるだけに、今後も多くの実践を積み重ねるとともに授業設計の改善を図っていきたい。

## 注

- 1) 木原俊行 (2011) 『活用型学力を育てる授業づくり－思考・判断・表現力を高めるための指導と評価の工夫－』 ミネルヴァ書房、pp.95-116
- 2) 文部科学省「小学校学習指導要領解説 社会編」東洋館出版、p.4 なお、新学習指導要領解説においても「課題を追究したり解決したりする活動」の充実を図るためには、問題解決的な学習過程を充実させることが大切である、と明記されており、現行学習指導要領と同様の説明がなされている。
- 3) 澤井陽介・中田正弘 (2014) 『ステップ解説社会科授業のつくり方』 東洋館出版、p.31
- 4) 調査として使用したのは、全国小学校社会科研究協議会研究大会の冊子である。今回の調査においては、平成 15 年東京、平成 16 年名古屋、平成 17 年広島、平成 18 年長崎、平成 19 年宮城、平成 20 年大阪、平成 21 年神奈川、平成 22 年徳島、平成 23 年石川、平成 24 年高知、平成 25 年東京、平成 26 年京都大会のものを調査した。
- 5) 藤井千春(1994)『問題解決学習のストラテジー』 明治図書、p.23
- 6) 北俊夫 (2014) 『社会科学習問題づくりのアイデア』 明治図書、p.49
- 7) H. グードヨンス (2005) 『行為する授業－授業のプロジェクト化をめざして－』 (久田敏彦ほか訳) ミネルヴァ書房、pp.98-117
- 8) 振り返りを記述した在籍児童数 39 名の中から抜粋した。

## (付記)

本稿は、日本社会科教育学会 (2015.9) での自由発表を基に作成した。